

教育実習における板書型指導案の教育的効果について

前原 隆志^{*1}・静屋 智^{*2}・長友 義彦^{*3}・森重 孝介^{*4}・内田 健一^{*5}・國重 裕美^{*6}・関本 努^{*7}

On the Educational Effect of the Board Style Teaching Plan in Teaching Practice

MAEHARA Takashi^{*1}, SIZUYA Satoru^{*2}, NAGATOMO Yoshihiko^{*3}, MORISIGE Kousuke^{*4},
UCHIDA Kenichi^{*5}, KUNISIGE Hiromi^{*6}, SEKIMOTO Tsutomu^{*7}

(Received August 2, 2018)

キーワード：教育実習、板書型指導案

はじめに

山口県内においては、初任者研修をはじめ、通常の校内研修会や県・市町教育委員会の訪問等で、板書型指導案を活用した授業研究が広く行われている。板書型指導案（以下、「板書型」）とは、「主眼（ねらい）」「板書計画」「発問」をA4用紙1枚に簡潔にまとめた形式の指導案である。その特長としては、（1）授業イメージが可視化できること、（2）学習内容が整理できること、（3）授業記録として活用できること等がある。

山口大学教育学部では、学部4年生が公立学校での委託実習を行うが、その際、実習校から大学に対し「板書型指導案が書けるように学生に事前指導しておいてほしい」との要望も出されている現状にある。

こうした中、附属学校の教育実習でも、従来の学習内容・活動や教師の支援等を時系列に並べた通常型学習指導案（以下、「通常型」）に加えて、板書型を活用する動きも見られる。しかし、板書型を使用することによる教育的効果や、新たな指導案形式を導入する上での課題克服の方策は、まだ十分検証されていない。

そこで、本研究の実施に当たっては、山口大学教育学部附属山口小学校、同山口中学校、同光小学校、同光中学校で行われる教育実習で、板書型と通常型の両者を使用し、教育実習生と指導教員を対象とする質問紙調査により、その教育効果を比較・検証した。

具体的には、以下の2点について検証し、教育実習の指導改善に生かしたい。

① 板書型と通常型の教育的効果の比較

教育実習の実地指導において、板書型と通常型の両方を使用し、それぞれの効果について、教育実習生と指導教員にアンケートを実施して検証する。

② 実施上の課題に関する改善方策の提案

板書型を使用した際の実施上の課題を明らかにすると共に、その改善方策について、附属学校教員や大学教員の意見をもとに、効果的な対策を提案する。

1. 質問紙調査の概要

本研究では、「指導案形式に関するアンケート」を実施し、その結果を基に、分析・考察を進めた。アンケート実施に当たって留意した点は、以下の3点である。

- ① 教育実習における指導のうち、事前指導、実地授業、事後指導、次年度への活用などの各段階で、使用する指導案の形式により教育的効果に差が見られるかについて確認できるようにした。

*1 山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻（現 防府市立右田中学校） *2 山口大学大学院教育学研究科教職実践高度化専攻 *3 山口大学教育学部附属教育実践総合センター *4 山口大学養育学部附属山口小学校 *5 山口大学教育学部附属山口中学校 *6 山口大学教育学部附属光小学校 *7 山口大学教育学部附属光中学校

- ② 板書型と通常型で同様の質問内容を設定し、回答者ごとにその差を確認した。
- ③ 教育実習生と指導教員とに同様の質問内容を設定し、両者の受け止めの差を確認した。

1-1 質問紙調査実施要項について

調査概要は、以下の実施要項のとおりである。

- ① 実施主体 山口大学教育学部 学部附属共同プロジェクト
「教育実習における板書型指導案の教育的効果に関する検証プロジェクト」
- ② プロジェクト組織
前原隆志（代表、教職大学院） 静屋智（教職大学院） 長友義彦（教育実践総合センター）
森重孝介（附属山口小） 内田健一（附属山口中） 國重裕美（附属光小） 関本努（附属光中）
- ③ 調査の目的
附属学校の基本実習の現地指導において、板書型指導案を活用することによる教育的効果を検証し、併せて、明らかになった実施上の課題を克服する方策を提案することを目的とする。
- ④ 調査の実施方法
 - 実施時期 平成29年10月（後期基本実習終了時点）
 - 実施対象
 - ・附属山口小・中、附属光小・中学校の教員（約80名）（指導教員用アンケート）
 - ・教育実習生（約180名）（教育実習生用アンケート）
 - 実施方法
 - ・アンケート「その1（板書型指導案）」「その2（通常型指導案）」を両面印刷し、対象者に配布し、選択回答と記述により調査する。
 - ・教育実習で板書型指導案を使用しなかった場合は、「その2（通常型指導案）」のみ、記入する。
- ⑤ 調査内容
以下の内容について、板書型指導案と通常型指導案を使用した際の効果を比較する。
 - (1) 大学における指導案作成の受指導経験
 - (2) 事前指導における、教育実習生による授業説明のわかりやすさ、授業準備のしやすさ
 - (3) 現地授業における、授業実施のしやすさ（自由記述）、授業観察のしやすさ
 - (4) 事後指導における、授業改善に向けた指導、研究協議のしやすさ
 - (5) 次年度以降における、参考資料としての活用のしやすさ
 - (6) 板書型・通常型指導案を使用する際の課題とその対応案（自由記述）

1-2 アンケート回答者について

アンケートの回答総数は、教育実習生136名、指導教員52名、合計188名であり、その内訳は、下表1・2の通りである。

表1 アンケートの回収数・回収率（教育実習生）

地区	小学校		中学校		合計数
	有効回収数	有効回収率	有効回収数	有効回収率	
山口	55	95%	0	0%	136
光	45	100%	36	100%	
合計	100	97%	36	41%	

表2 アンケートの回収数・回収率（指導教員）

地区	小学校		中学校		合計数
	有効回収数	有効回収率	有効回収数	有効回収率	
山口	13	100%	14	61%	52
光	11	92%	14	93%	
合計	24	96%	28	74%	

2. 板書型指導案と通常型指導案の教育的効果の比較

次に、アンケート結果から板書型と通常型の教育実習における教育効果について、分析と考察を行う。

設問内容は、教育実習の指導の流れに沿って、大学における学習指導案の作成に関する受指導経験、授業の事前準備、指導教員からの事前指導、現地授業、事後指導、次年度への活用、等の順に設定されている。

設問内容ごとに、教育実習生の回答と指導教員の回答を比較し、それぞれの受け止め方の特徴や差について、自由記述を踏まえて考察する。

2-1 指導案作成の指導について

山口大学では、3年前期に副免許校種の実習を、3年後期に主免許校種の実習を行う。図1は、指導案の書き方について、大学3年後期教育実習までに大学で指導を受けた経験に関する回答である。

通常型については、「指導案を書いて実地授業も実施したことがある」とする回答が6割を超える。これは、前期実習での経験者が含まれていることも理由と考えられる。しかし、「今回の教育実習で初めて指導を受けた」との回答が7.5%、人数にして約10人いることは、今後の課題の一つと考えられる。

一方、板書型の作成に関しては、これまで指導を受けた経験のある実習生と、初めて指導を受けた実習生がほぼ半数ずつである。山口県の教育現場では広く活用されている指導案形式が、大学でも指導されつつある状況が見られる一方、初めて経験する実習生には戸惑いや不安があることも予想される。自由記述として、教育実習生からは「事前に板書型指導案について指導があると良いと感じた。」といった意見があり、附属学校の指導教員からも大学での指導を求める声があった。学校現場での活用の現状を踏まえ、板書型の意義や書き方について、事前に指導をする場面が必要とされている。

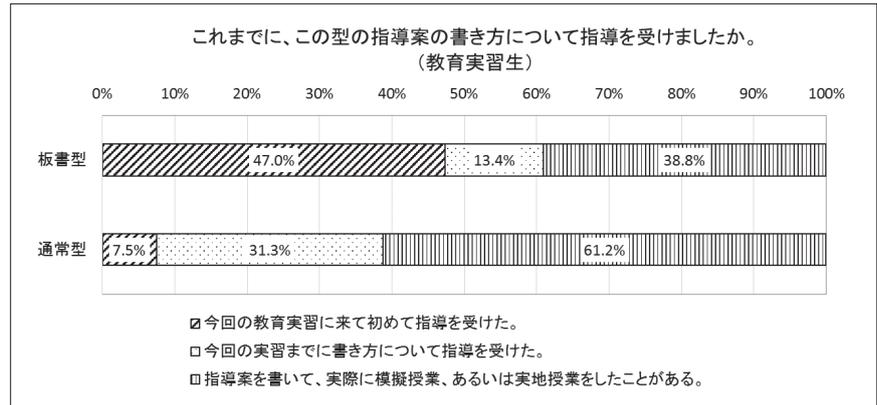


図1 指導案作成に関する受指導経験

2-2 作成時間について

図2は指導案作成の所要時間についての回答を示したグラフである。通常型の作成に要する時間は、4～8時間が41.8%で最も多く、一般的に教育実習生が指導案作成に要する時間は、1日程度と考えることができる。

これに対して、板書型は一般的に短い傾向にある。2時間未満が9.7%、2～4時間が30.6%、4～8時間が31.3%であり、約7割が1日以内で作成している。

板書型の作成時間が短い理由としては、「通常型では、別に板書と流れを書いておく必要があったが、板書型はそれをまとめて書いておけたから。」などの感想が見られる。

また、指導教員の「板書型にしたことで作成と添削の時間が短くなり、放課後に模擬授業を多く実施できた。」といった記述に見られるように、紙ベースの指導案作成の時間を短縮し、実際に教壇に立って模擬授業をしたり、教具を準備したりする中で、授業の流れを具体的にイメージし、実地の授業力を付けるといった取組も進められている。

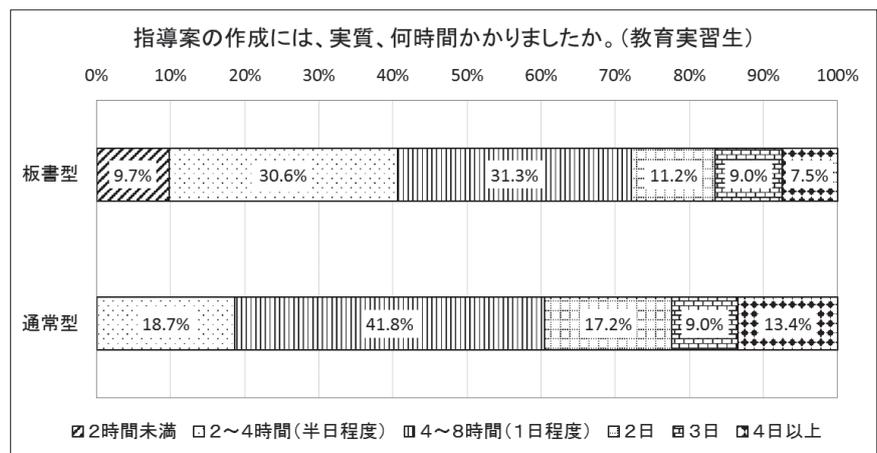


図2 指導案作成に要する時間

2-3 授業説明について

事前指導における教育実習生から指導教員への授業説明のしやすさ、分かりやすさに関する4件法による設問について、「よくあてはまる・ややあてはまる」を合わせた肯定的評価の割合は、教育実習生が板書型で76.8%、通常型で90.3% (図3)、指導教員は板書型で55.5%、通常型で80.4%である (図4)。実習生・指導教員とも、通常型の方が授業説明がやりやすく、よく分かると回答している。

通常型では、指導内容が上から下に時系列で記載されていることから、授業の展開に沿って説明しやすいため、説明が容易になると考えられる。

これに対して板書型では、何を中心に説明するのが曖昧になりやすい。授業の進行に合わせて、発問、板書、留意点の3つを結びつけながら説明する必要があることから、肯定的な回答が少なくなったと考えられる。

特に、指導教員の44.4%が否定的回答となっていることは、指導上の課題を浮き彫りにしている。すなわち、板書型を見ても、実習生が構想した授業展開や学習内容が読み取れないということである。これは、指導案の形式が原因であるのか、それとも、授業構想が曖昧であるため、板書型にしたときその曖昧さが露呈したのかを考える必要がある。板書型の限られたスペースで要点を適切に記載できるかどうか問われていると言えよう。

2-4 授業準備について

授業準備や改善のしやすさについて、肯定的評価の割合は、教育実習生が板書型で74.6%、通常型で92.6%であり(図5)、指導教員は、板書型は63.6%、通常型は80.4%である(図6)。実習生、指導教員とも、通常型の方が授業準備しやすいと回答していることが分かる。

その理由として、授業展開を重視する従来型であれば、「教師の働きかけ→予想される反応→指導上の留意点」が一つのまとまりとして意識できる。一方、板書型ではこの一連の流れが意識しにくい。指導教員の記述に「指導案の中に生徒の反応、手立てを書き込めず、作った授業もそういった部分が抜け落ちていた」との指摘がある。教育実習生も「指導上の留意点を書くスペースが少ないので、模擬授業で細かいところを詰める必要がある。」と考えているように、板書型を使用する場合は、児童生徒の反応を予想し、授業を練り上げる過程が欠かせないことに留意する必要がある。

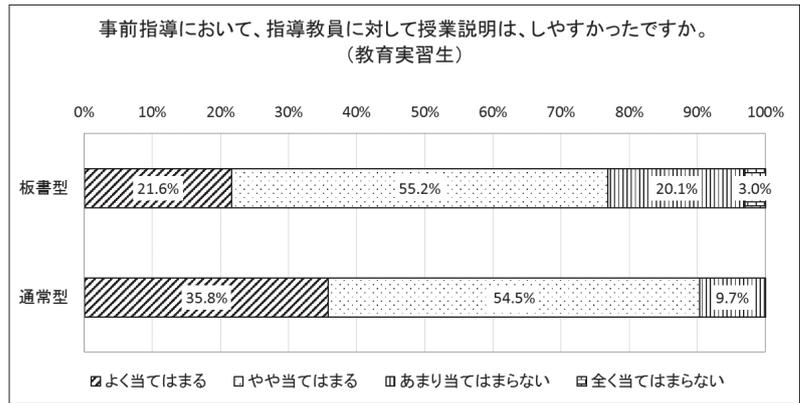


図3 事前指導における授業説明のしやすさ (教育実習生)

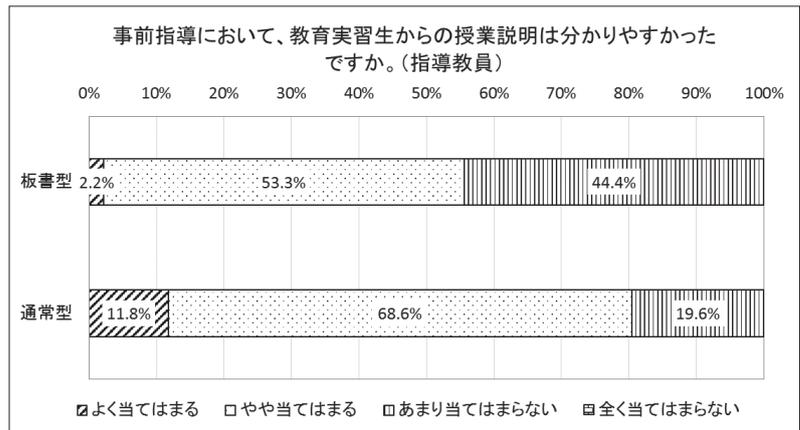


図4 事前指導における授業説明の分かりやすさ (指導教員)

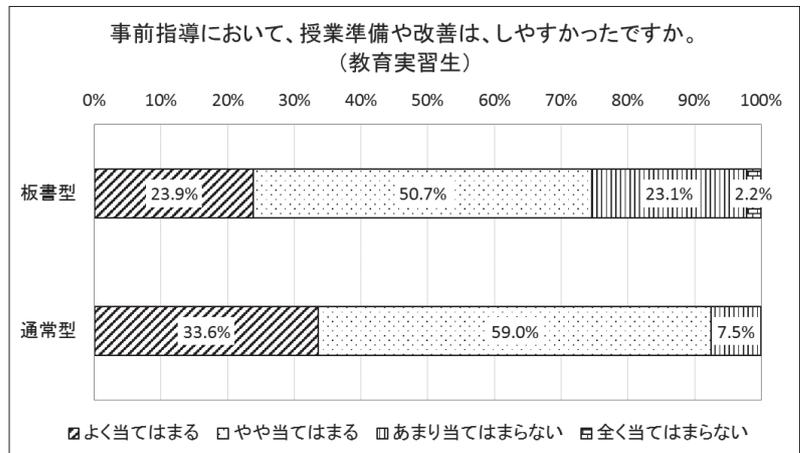


図5 事前指導における授業準備のしやすさ (教育実習生)

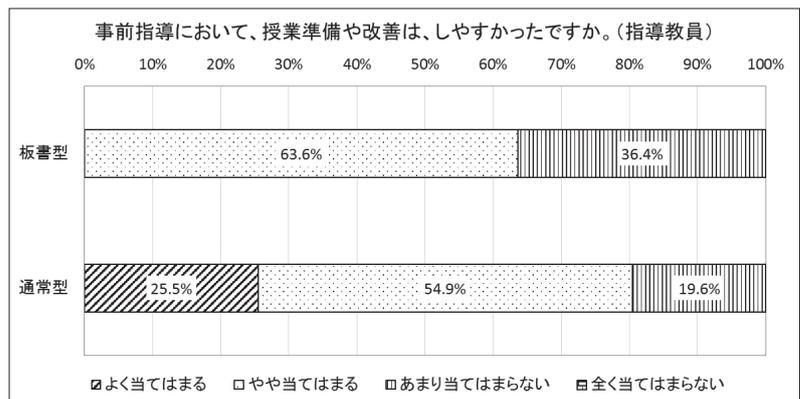


図6 事前指導における授業準備のしやすさ (指導教員)

2-5 実地授業について

実地授業における授業のしやすさについて、教育実習生全体の肯定的回答は、板書型で77.6%、通常型で73.1であり、板書型の方が若干高い結果である（図7）。

さらに校種ごとに集計すると、小学校での肯定的回答は、板書型が86.9%、通常型が73.4%であるのに対し（図8）、中学校では、板書型が51.4%、通常型が72.2%であり（図9）、評価が小・中学校で逆転していることがわかる。特に、中学校では、板書型の評価について、「良く当てはまる」から「全く当てはまらない」までの4つの選択肢に、回答が分散していることが注目される。高い評価がある一方で、強い否定的な評価もあることを示している。

授業がやりやすいと回答した教育実習生からは、「指導案を見ながら授業をするときに、学習の流れと学習内容の板書が1枚に収まっているから。」といった声がある。特に小学校では、完成した板書をイメージできるメリットを感じる教育実習生が多かったと考えられる。

一方、中学校において板書型での授業のしやすさについて評価が低い理由として、特に実技系教科では活動が中心であったり、プレゼンテーションソフトによる教材提示が行われたりすることにより、板書が授業進行の中心とはならない場合が上げられる。「技術は実技教科のため、実際にものに触れさせたり活動したり映像を見せたりといったことが他教科に比べて多く、板書は逆に少ないため、板書計画から考えるスタイルは自分には合わなかった。」といった声は、小・中学校の図工、音楽、体育、生活等でも同様だと考えられる。

指導教員による肯定的評価は板書型が77.8%、通常型が76.4%とほぼ同様である（図10）。指導案形式によって授業の出来、不出来に大きな差はないとの受け止めとも考えられる。しかし、「よく当てはまる」という強い肯定的評価については、通常型の方が高い。

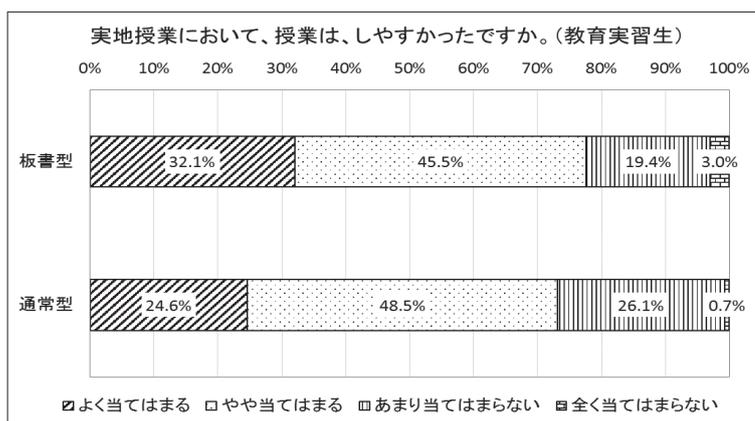


図7 実地授業のしやすさ（教育実習生）

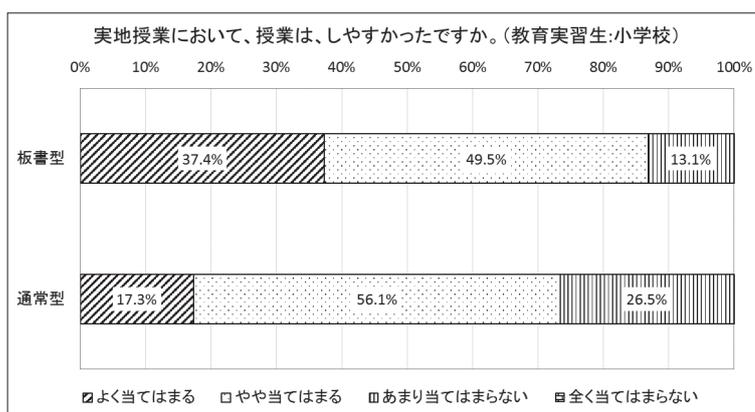


図8 実地授業のしやすさ（教育実習生：小学校）

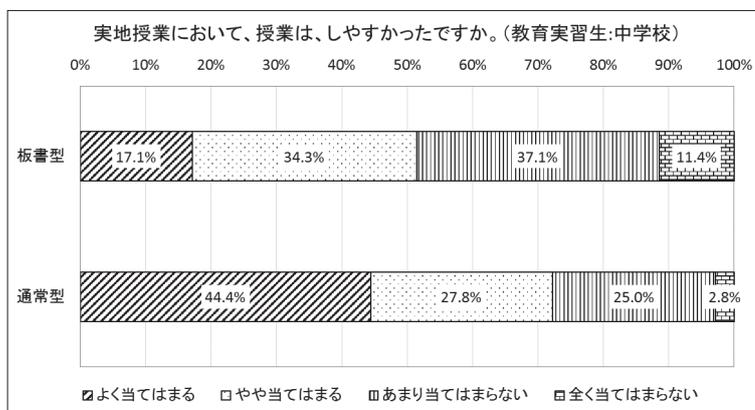


図9 実地授業のしやすさ（教育実習生：中学校）

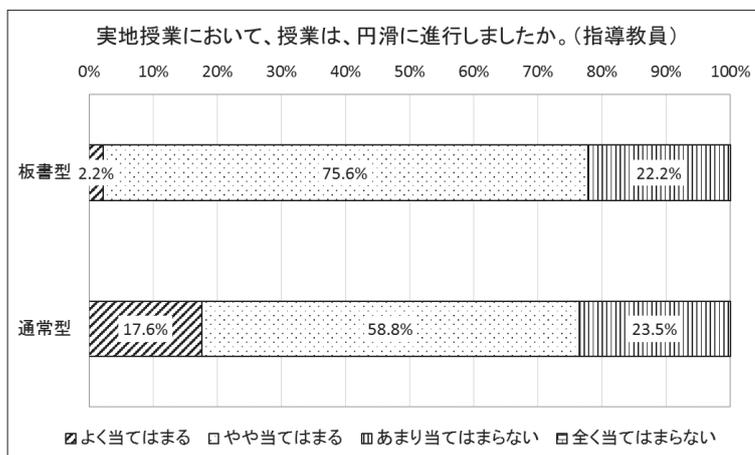


図10 実地授業のしやすさ（指導教員）

2-6 授業改善について

事後指導における授業改善のしやすさについては、教育実習生の肯定的回答が、

板書型で63.4%、通常型で84.6%（図11）、指導教員の肯定的回答が、板書型で57.8%、通常型で88.0%である（図12）。教育実習生、指導教員とも、通常型の方が授業改善しやすいという回答である。

こうした評価になった理由として、板書は児童生徒の反応によって変化していくものであるという考え方がある。一方、構造的な板書計画は、児童生徒の反応を予測して作成されており、大まかな骨格は設定できるという考え方もある。むしろ、板書型によって当初計画した基本的な構造の改善を検討することが、授業改善につながると考えられる。

さらに、「板書部分をパソコンで作成しようとする」と図や枠囲み、矢印などの入力に時間がかかり、修正に手間取る」といった作成方法に関する課題が挙げられている。「板書部分を手書きにすると、スムーズに埋まる」といった声も、自由記述に多く見られた。

2-7 研究協議について

事後指導における研究協議のしやすさについては、教育実習生の肯定的回答が、

板書型で68.1%、通常型で85.3%（図13）、指導教員の肯定的回答が、板書型で57.8%、通常型で82.0%である（図14）。教育実習生、指導教員とも、通常型の方が研究協議しやすいという回答である。

こうした評価になった理由としては、板書型は、板書計画が中心であるため、「児童生徒の反応」や「教師の手立て、支援」などが文字として記載されていないことが考えられる。

研究協議の中で、児童生徒の既習事項や思考の流れに関する情報が、指導案上に少ないことは課題である。この改善策として、指導教員からは、「手立てを書くところが薄っぺらくなるため、吹き出しのような形で、活動に対応して書くようにする。」といった提案も見られる。予想される児童生徒の反応や発言を、板書計画上に記入しておくことで、授業実施後の協議に生かされると考えられる。

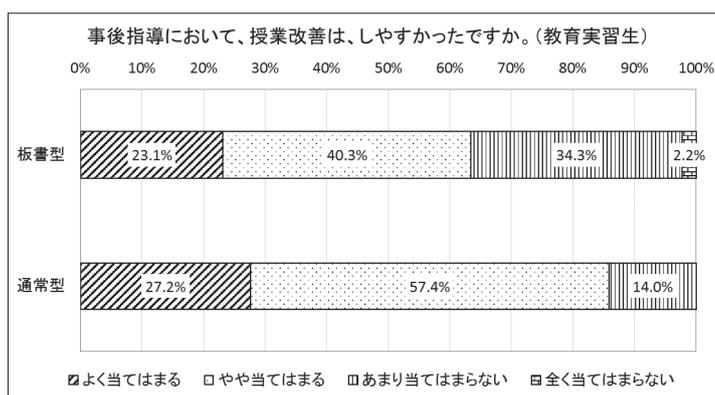


図11 事後指導における授業改善のしやすさ（教育実習生）

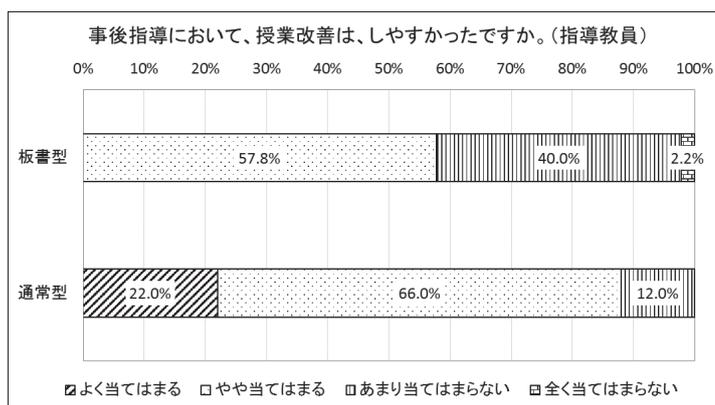


図12 事後指導における授業改善のしやすさ（指導教員）

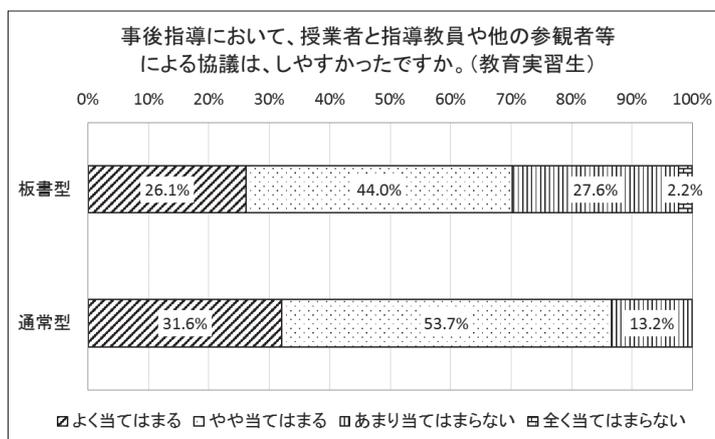


図13 事後指導における研究協議のしやすさ（教育実習生）

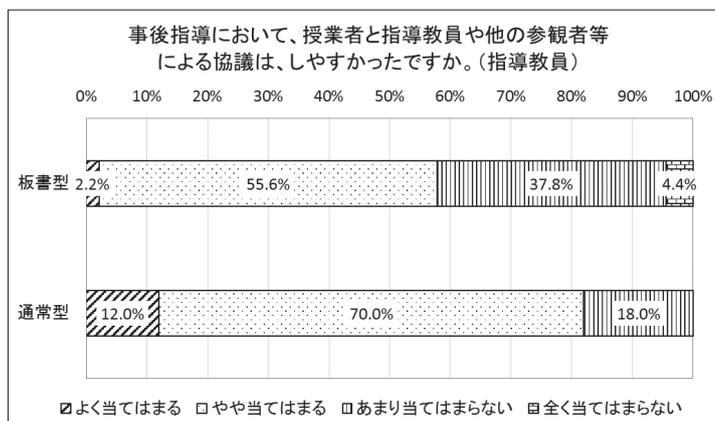


図14 事後指導における研究協議のしやすさ（指導教員）

2-8 次年度資料

次年度以降の資料としての活用については、教育実習生の肯定的回答が、

板書型で79.1%、通常型で87.5%（図15）、指導教員の肯定的回答が、板書型で68.8%、通常型で88.3%である（図16）。教育実習生、指導教員とも、通常型の方が次年度の資料として活用しやすいという回答である。

板書型について、教育実習生のうち、約3割が「よく当てはまる」という強い肯定的評価を、また約半数が「やや当てはまる」と評価している。その一方、「全く当てはまらない」という強い否定的評価が、教育実習生にも指導教員にも若干数あることは、課題と捉える必要がある。

板書型では、計画した板書に手書きで修正した際、メモ書きが増えるため、それを整理して次年度に活用することが難しいと感じられたようである。また、実技系教科等で実際に板書がされない場合は活用が難しい。

さらに、「授業後に反省をいかし作成する方が、効果がある」といった意見もあり、活用方法の検討も必要である。

2-9 各項目における板書型と通常型の比較

図17は、図3～16に示した設問ごとに、同一項目について同一者が4件法で評価したとき、板書型と通常型のいずれを高く評価したかを集計したグラフである。

ここでは、小学校と中学校で傾向が異なることに注目したい。教育実習生のうち、小学校では板書型と通常型を同等と評価する回答が53.2%で最も多いのに対し、中学校では通常型を肯定する評価が50.9%で最も多い。

指導教員の回答では、同等とする割合が小学校で55.2%と最も高い。中学校では、同等とする45.0%と、通常型を肯定する44.3%がほぼ拮抗している（図18）。

全体的な傾向として、小学校と中学校との間で評価が異なっていることが分かる。この傾向は、「2-5 実地授業のしやすさ」と同様の結果であり、指導案形式の評価は、実際の授業がしやすかったか否かによる印象が強いと言えよう。

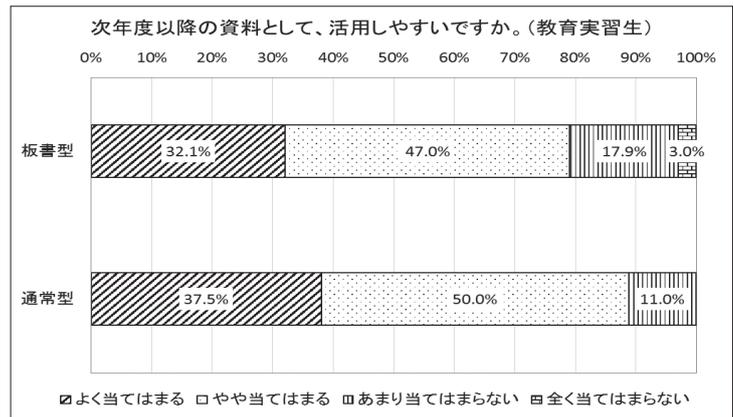


図15 次年度資料としての活用のしやすさ（教育実習生）

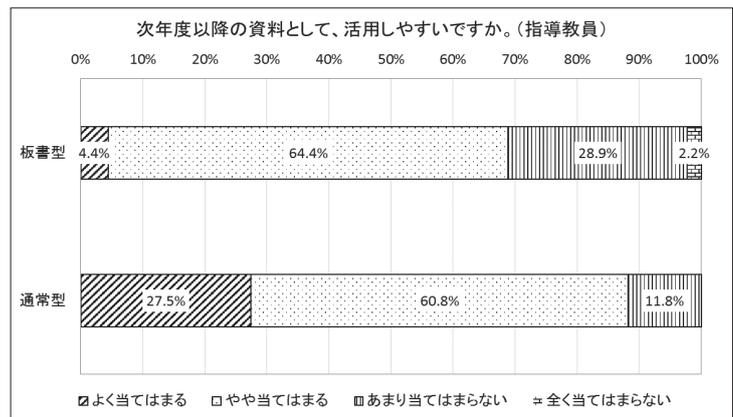


図16 次年度資料としての活用のしやすさ（指導教員）

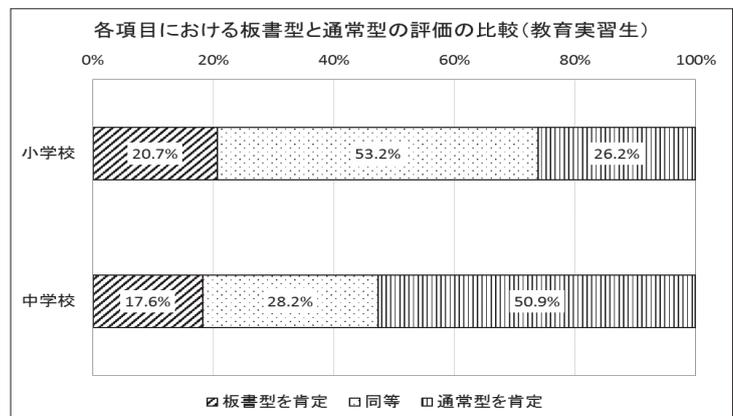


図17 板書型と通常型の評価比較（教育実習生）

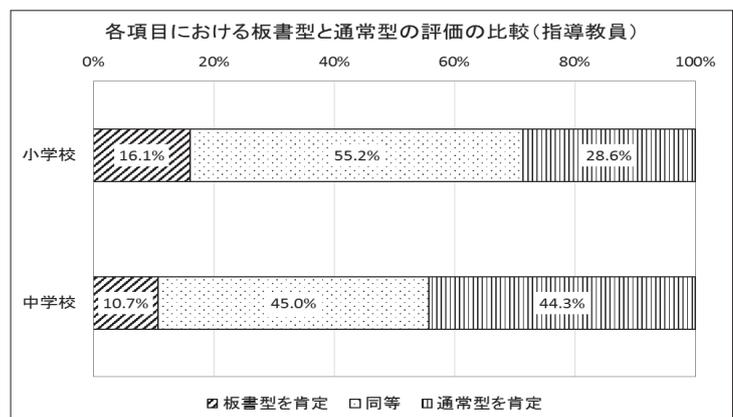


図18 板書型と通常型の評価比較（指導教員）

3. 実施上の課題に関する改善方策の提案

本章では、上記のアンケート結果と、教育実習生や指導教員の自由記述を踏まえ、附属学校教員や大学教員の意見をもとに、教育実習における板書型指導案の活用に関して以下の各点から提案をしたい。

3-1 大学での事前指導の実施

山口県内の公立小・中学校で広く板書型が活用されている現状を踏まえると、地域にある大学教育学部の授業においても、その概要や活用について指導することが求められる。教育実習生や指導教員からも「大学の授業で書き方を学習し、実際に模擬授業をする必要があると考える。」といった要望があげられている。

具体的には、各教科教育法の授業等での指導や、教育実習の事前指導での紹介等が考えられる。ここで重要なことは、板書型と通常型の両者の長を明確に捉え、教材研究や授業準備に必要なことを簡潔、明瞭に提示できるよう指導することである。通常型は、授業展開が時系列に記載されることから、教師の働きかけに応じて児童生徒が反応し、それを教師が支援する流れが読み取りやすい。一方で、板書型は、学習内容と指導の流れが板書を中心に視覚化できることから、1単位時間を終末まで見通し、総合的にデザインしやすい。こうした両者の長を理解した上で、教育実習の指導や授業準備に活用することが大切である。

さらに、教育実習生からは、板書型指導案を作成する上での条件整備として、パソコン作成を容易にするフォーマットの提供や、指導案事例の紹介についても要望があげられていることから、こうした情報の収集や提供が求められている。

3-2 指導案作成と事前指導

① 板書計画を先行させるメリット

板書型指導案を作成した教育実習生からは、「自身の思考の流れを板書として視覚的に表すことが教材研究の段階でできたので、授業をイメージしやすかった」との声がある。一方、通常型で指導した教員からは、「これまでも、指導案を作成するなかで、板書計画も合わせて検討していた」との指摘もある。いずれも、授業検討において、板書は重要なアイテムとして位置付けられていることを示している。

板書型の場合、実習生はまず板書計画を作成し、その周りに発問や留意点を記入していくことが多い。これに対して、通常型の場合、まず授業の流れを文字で書き起こし、後から板書計画を作成することが多い。ここには、授業構想を練る際の手順として、板書が先か、流れが先か、による違いがある。

板書型の場合、板書計画が先行することで授業の流れが比較的早く視覚化されることで、学習内容と学習展開の関係が視覚化・言語化されやすいため、通常型より作成時間が短縮できる傾向にある。しかし一方で、指導教員からは「児童生徒の反応や教師の対応が熟考できておらず、授業を計画通り進めることに焦点が当たっていた」との指摘があり、実習生からも「板書に頼らずに、手立てや支援などの細部までイメージすることが大切」との反省が見られる。板書型のメリットは、指導案作成と添削の時間を縮減することで生まれた時間を、模擬授業の実施にあてることができると言えるのではないか。

一方、通常型を作成した実習生は、多くの場合、完成した指導案に沿って板書計画を作成している。さらに、実際の授業場面では教壇で指導案の文字を目で追いながら授業をすることが難しいため、これとは別に、授業進行の流れが分かるよう、セリフを書き込んだシナリオを作成し、そのメモを見ながら授業する実習生も多い。ここでは、指導案の文面を完成させるというハードルを越えた後、そこに記載された文言を授業として実現する際に、実習生が苦心している様子が窺える。授業は、教師が教材を提示し、発問し、児童生徒がそれに反応して発言し、その内容を黒板に記録するといった流れで進行しており、板書と授業の流れは同時進行である。従って、通常型の作成においても、板書（学習内容）、学習活動、教師の働きかけを一体のものとして検討される必要がある。

② 単元を意識した授業づくり

板書型指導案について、指導教員から「単元計画を記すところがないため、単元の流れが分からず、実習生も意識せずに1単位時間の授業を作ってしまう。単元計画も箇条書き風にするとうい。」「板書型でも、それまでに子どもがどのようなことを学んで来たのか、またこれから何を学んでいくのかを意識できるようにしていきたい。」といった指摘があがっている。板書型は簡略形の指導案形式であるため、単元で授業をつくるという意識が抜け落ちやすい。このために、意図的に単元の流れについて記載を促した

り、事前指導の中で意識付けを図ったりしていく必要がある。また、同じ単元を複数の学生で授業をする際、板書を突き合わせてみながら、前時の指導を振り返りつなげることができる。ここに単元を意識した授業展開を学生に指導できるチャンスが生まれる。

③ 板書部分の手書き

教育実習生からは、「板書をパソコンで作成することが難しい」といった意見が多く寄せられている。この点について、板書型指導案の提案者である板倉豊氏は、「図やイメージ、算数における分数などを描く際、発想に従ってイメージ図に自由に加筆しながら、しかもパソコン操作に手間取ることなくスムーズに書き込めることが必要であり、そのためには、板書部分を手書きにすることは、大切な要素だ」と強く主張している。板書部分を手書きにして消しゴムで消して修正したり、実際に黒板に書いたものを写真として貼り付けたりするなど、柔軟で可塑性のある板書計画を取り入れた指導案が板書型であることを再確認する必要がある。

3-3 板書型指導案が効果的に活用できる授業での選択的实施

板書型指導案を使うことで、授業が円滑に進むか否かは、最も重要なテーマである。アンケート結果からは、小学校と中学校とで、また使用する教科によって評価が分かれている。このことから、板書型と通常型とは、状況に応じて使い分けることが必要であると言える。

これは、「小学校は板書型、中学校は通常型」としたり、「座学中心の教科は板書型で、実技系教科は通常型」と棲み分けたりすることでは決してない。授業内容に合わせて、選択する幅を広げ、より相応しい指導案形式を検討することが大切であることを示している。例えば、板書をしない実技中心の授業であっても、手順を整理して示すために板書型を活用するといった選択肢が考えられる。

また、教育実習の進捗状況を踏まえた使用も必要である。例えば、実習初期には板書型を取り入れ、短時間で実地授業の概要をつかむといった利用の仕方が考えられる。また一方で、実習初期には比較的授業準備の時間が多く取れるため、通常型を使って基本的な授業づくりの手順を学び、実習中盤では板書型を使って、学習内容と学習活動や子どもの反応、指導上の留意点などを総合的・俯瞰的にデザインするという方法もある。いずれにしても、実習最後の査定授業では、単元設定理由等まで詳細に記述した総案を作成するための時間を要することを想定し、教育実習期間内の適切な時期を選んで、効果的で効率的な指導案を選択し、活用することが必要である。

3-4 研究協議及び事後指導での活用

授業後の研究協議を行う際、教室に残っている板書の前で意見交換をすると、授業の様子や児童生徒の反応がリアルに思い出され、議論が活発になる事が多い。このように、板書は授業研究や授業改善の重要なアイテムの一つである。

しかし、アンケート結果からは、授業実施後の活用場面で、板書型に対する評価が低い結果となっている。その理由としては、板書型は簡略化された指導案であるため、授業者の意図や児童生徒の反応等の情報が少なく、指導案をもとに研究協議する場面では、指導案上の文字からだけでは意見交換をすることが難しいことが一因として考えられる。

こうした課題の改善に当たっては、授業者の意図が参観者にも伝わるように工夫することが求められる。例えば、指導案上にナンバーを付すことで、発問と板書と留意点が対応していることを示すことができる。そうすれば、協議の中で「①を見てください。子どもたちに①と発問を投げかけ、①と板書します。そのねらいは①のとおりです。」といった説明が可能になる。参観者も「①の場面で、子どもたちは…」と発言することができる。

また、予想される児童生徒の反応を板書計画の中に具体的に書き込んでおき、実際の反応と比較しながら、授業計画とは異なる結果となった場合の要因や改善方法を検討することも大切である。例えば、白紙のホワイトボード枠をグループ数だけ並べるのではなく、児童生徒が記載することが予想されるキーセンテンスについて、枠内に書き込み、それらを分類して黒板上に貼り付けた結果を板書計画として示しておく、等の工夫が考えられる。

3-5 次年度への活用

板書型は簡略形の指導案形式であるため、他者への説明の場面では、口頭による解説を伴って初めて理解される事も多い。しかし、1時間の授業の様子をA4用紙1枚で一目見て直感的に知ることができ、授業イメージが可視化できるという利点もある。さらに、授業後の板書を、デジタルカメラで撮影し、プリントアウトして比較することで、授業構想と実際の授業の間の違いについて、授業を直接参観できなかった他者も両者を容易に比較することができる。

板書型は、授業を総合的にデザインすることができる指導案形式であるという利点を生かして、次年度の実践へと活用する方法を考えてみたい。次年度の実習生にとって、先輩が実施した授業の板書計画や板書記録は貴重な資料である。リアルな教室の様子をイメージしたり、どんな教材をどんな手順で示したのかを板書を通して確認したりできることは、教育実習のレベルアップにつながる。文字として残される通常型の蓄積も有効ではあるが、実際に教師がどんな問いかけをし、子どもたちの反応をどう記録したのかを知るためには、板書型指導案と板書記録のパックが残されていることが効果的である。

実習指導をする附属学校の教員にとっても、毎年ほぼ同時期に同一教材を指導する場面が多いことから、前年の蓄積を生かしながら指導の質や効率を上げていくことが求められる。そのためには、指導上の資料として、こうした記録を蓄積し共有することは大切である。

おわりに

本研究では、山口大学教育学部附属山口小学校、同山口中学校、同光小学校、同光中学校の教員と教育実習生の協力を得て、教育実習で板書型指導案を活用した実習指導を行い、その教育的効果を通常型指導案と比較した。慣れない板書型という形式で実習指導をしていただいた指導教員の先生方と、授業づくりに取り組んだ実習生の皆さんにまず感謝したい。

研究成果として、次の3点が整理できる。

- ① 実習指導をする上で、板書型が効果的な場面を選んで活用することが必要であること。例えば、校種、教科、領域や内容、教育実習期間中の習熟状況等を考慮し、板書型での指導が相応しい場面を選んで活用すること。
- ② 板書型指導案を活用するための条件整備が必要であること。具体的には、大学における事前指導の実施、フォーマットや指導案事例等の情報提供、附属学校教員に対する板書型指導案の作成方法や、授業をイメージ化するための読み方等の情報提供、さらには、次年度への継続的な資料収集等が求められること。
- ③ 板書型にすることで授業イメージが可視化されることが、指導案作成時間の短縮につながる。すなわち板書型では、学習目標、学習内容、学習方法、学習評価などのキーワードやキーセンテンスを板書の中に端的に盛り込むことで、授業を総合的にデザインすることが可能になる。この結果、板書型の記述に慣れてくると、指導案作成が速くなると考えられる。さらに、児童生徒の反応予想や教師の具体的な手立てについて模擬授業などを通して熟考し、実践的授業力を向上させる工夫が必要であることも明らかになった。

山口県内の公立小・中学校で広く活用が進められている板書型指導案について、地元大学教育学部や附属学校が全くノータッチというわけにはいかない。その効果や課題を理解した上で、効果的に教育実習に取り入れることが求められている。そのノウハウが附属学校教員間に共有されることで、教育実習においても、校種や教科を越えた小・中学校間での指導の一貫性を図ることが可能になると考えられる。

付記

○本研究は、平成29年度山口大学教育学部・附属共同プロジェクトの成果報告の一部である。

○本研究において、貴重な情報を提供いただいた山口大学教育学部附属山口小学校、同山口中学校、同光小学校、同光中学校の教職員と教育実習生の皆様に改めて心からの敬意と謝意を表します。